

出典：池田光穂「政治的暴力と人類学を考える：グアテマラの現在」、『社会人類学年報』、第28巻、Pp. 27-54, 2002年8月所収、第二節 政治的暴力の概念

「政治的暴力」を理解する鍵として、私はアーレントの議論に負う。アーレントは、一九六〇年代末からのアメリカ合州国の大学キャンパスを中心とする若い世代による暴力の横溢現象を、国家が戦争を手段として行使する時代の終焉と関連づけて論じている [アーレント 一九七三、一九九五]。彼女によれば、戦争はテクノロジーに依存した暴力を行使することに他ならないが、破壊のテクノロジーが肥大化してもはや限界に達した時、戦争が意味をもっていた国際関係以外の文脈—とくに革命—において暴力そのものの意義が浮上してくるのだという。その際に彼女の認識論的作業における留意すべき点を指摘しておかねばならない。彼女は、政治的次元においては、暴力と権力を相矛盾する概念としてとらえている。権力とは「行動する力のみならず、他人と協力して行動する人間の能力に対応」し、個人においてはそれを所有できないものとする。つまり権力を集団的強制力そのものではなく、それを産み出す力と見るのである [アーレント 一九七三：一二二]。個人的に所有できる力は、「権威」と呼び彼女はそれを「権力」から区別する。それに対して暴力は道具による即物的「力」であり、その道具に依存する性格からして自然の力を倍増するものとして設計使用される。しかし最終的にはその暴力は自然の力に代替できるものである。

彼女は、権力と暴力を次のように区分する。「権力と暴力との間のもっとも明白な一つの相違点は、権力が常に数を必要とするのに対し、暴力は道具に依存しているために、あるところまでは数に頼らないでやっていけることである。……権力の極端な形態は全員が一人に敵対する

ものであり、暴力の極端な形態は一人が全員を敵とするものである。後者は道具なしには実行できない」[アーレント 一九七三：一二五]。したがって、暴力の反対語は、我々が考える非暴力ではない。暴力の相反物は個的なシンボリック力である権威であり、権力は個的には所有できない点で暴力とは矛盾するものである。権力を正常化するためには、暴力を極小化しなければならないという点で権力と暴力の関係はトレードオフの関係にある(4)。

彼女のビジョンは、警察や軍隊という暴力装置の所有と行使が唯一国家に与えられていると理解する現代の国家観とは明らかに異質な考えかたである。我々の伝統的な暴力観によれば、暴力の相反物是非暴力であり、国家に管理されている暴力（例えば警察、軍隊）とは権力の表象そのものに他ならないからである。したがって、我々はこれまで「政治的暴力」を国家暴力装置の濫用あるいは誤った行使と見てきたのである。権力とは本質的に暴力の行使とは無縁どころか、矛盾するものであるとみるアーレントの見解は、我々が陥りがちな別種の「常識」に疑問を投げかけるものである(5)。

近代国家における暴力装置の必要性についての議論は、「暴力は決してなくすことはできない」という現代の我々の心を支配する諦念に援護されて、暴力の根源性についてのイデオロギッシュな議論や、後述するように深層心理学というドグマによって独占されてきたからである。つまりアーレントの言う「誰の眼にも明らかな」暴力の実態を、人類学という具体的な「方法」を通して表象し、議論の俎上に載せる必要がある。

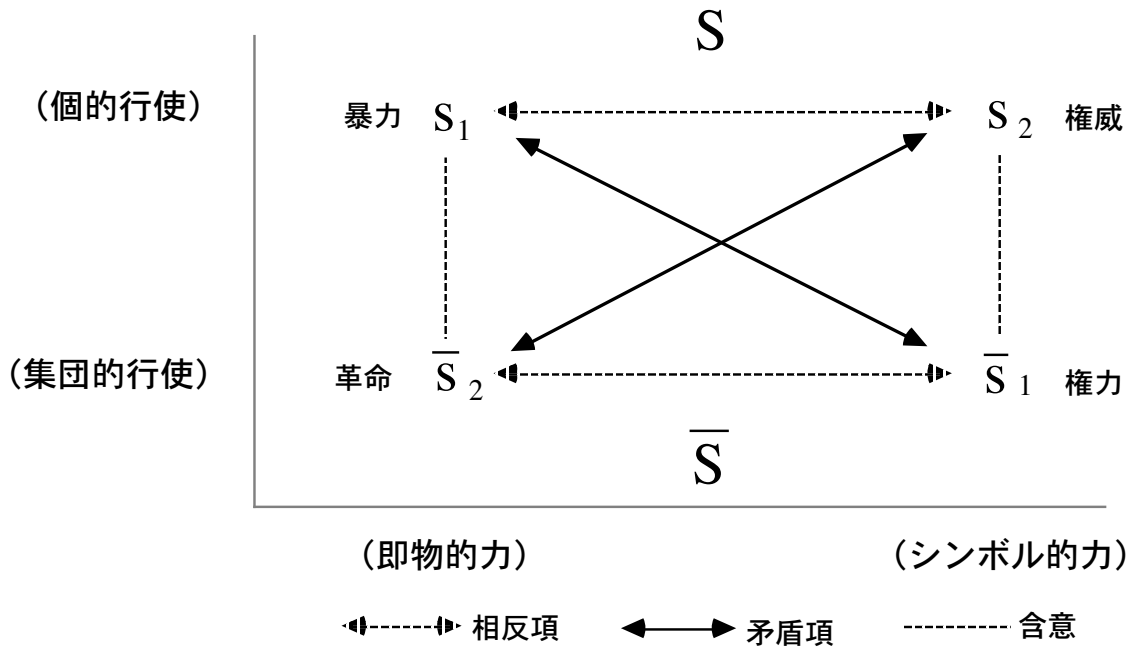


図1. 意味の四角形：アーレントの暴力概念

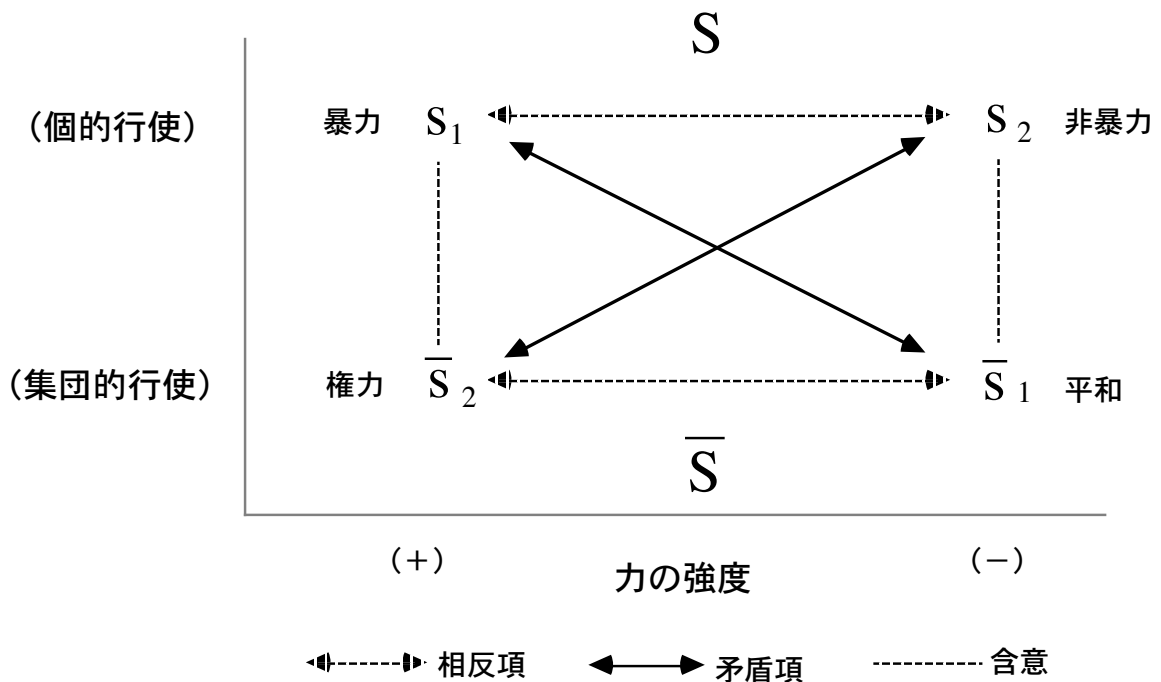


図2. 意味の四角形：近代国家における暴力装置概念